

挑まなければ、 得られない

Nothing ventured, nothing gained.

及川卓也 著 Takuya Oikawa

005
インプレス
選書

■本書の内容と商標について

- ・本書の内容は、2012年3月までの情報を基に執筆されています。紹介したWebサイトやアプリケーション、サービスは変更される可能性があります。
- ・本書の内容によって生じる、直接または間接被害について、著者ならびに弊社では、一切の責任を負いかねます。
- ・本書中の会社名、製品名、サービス名などは、一般に各社の登録商標、または商標です。なお、本書では©、®、TM は明記していません。

刊行に寄せて

佐々木俊尚

私はかなり以前から及川卓也さんと折りに触れて情報交換する仲で、2009年にベストセラーとなった拙書『2011年新聞・テレビ消滅』（2009年文藝春秋刊）では、本書でも言及されている「コンテンツ・コンテナ・コンベヤ」という及川さんオリジナルの概念を使わせていただいた。

及川さんとの会話は、実に刺激的だ。たとえば彼は、唐突にこんなことを語りはじめる。「佐々木さんね、これからは子供の名前をつけるのもすごく慎重にしなければならぬ時代になると思うよ」

「どうして？」

「エゴサーチされる時代だから」

エゴサーチというのは、自分の名前を検索エンジンで検索する行為のことだ。たとえば鈴木さんという人が自分の子供に「一朗」と名付ければ、その名前の平凡さに加えて、同姓同名にはあの不世出のプロ野球プレーヤーが屹立している。「鈴木一朗」という名前で検索して、鈴木さんのその息子が検索結果のランキングに浮上するのは至難の業だろう。

「平凡な人生を期待するのなら平凡な名前にしたほうがいいし、起業して一発当ててほし

いんだったら絶対奇抜な名前のほうがいい」

と及川さんは言った。なるほど、実に興味深い。この話の延長線は、本書の第一章でも「ロックバンドのThe Bandを検索するのが難しい」というエピソードとして紹介されている。これもとても面白い話だ。

及川さんは私には、これからの時代の新しい常識、新しい倫理、新しい構造を体现した人として映っている。

社会やビジネスの様相は、いま大きく変わろうとしている。以前、ITの開発分野で「伽藍とバザール」という言葉が流行ったことがあったけれども、いま始まっているのはこのバザール化が開発のみならずビジネスのすべて、さらには人間社会のすべてを呑み込もうとしていく変化だ。

その先には新しい社会構造、新しい産業構造がやってくる。いまはその移行期にあたり、これが見たいへんな混乱をわれわれの生きている世界にもたらしている。アメリカの社会学者リチャード・フロリダは、最近の著書『グレート・リセット』（邦訳2011年早川書房刊）で20世紀前半の激動の時代にどう生活が変わったかを書いている。

フロリダの両親は1920年代生まれで、30年代の大恐慌時代にはパンを買うために行列ができ、政府の配給する衣類をまとい、みじめな生活を余儀なくされた。父は13歳で学校を中退し、メガネ工場で働いてなんとか食いつないだのだという。

ところがそれから30年ほど経つと、両親は他の多くの人たちと同じように緑豊かな郊外にマイホームを構え、ピカピカのシボレー・インパラを乗り回し、洗濯機やテレビを所有するようになる。

これは過去に何度も起きてきた社会のライフサイクルだとフロリダは言う。「たいへんな苦難をともなったこともあっただろうが、木々が秋に葉を落として翌春の新たな成長に備えるように、経済も自ずとリセットする。危機が起こった場合、うまく機能している部分としていない部分が明らかにになる。そのような時期には、古くさいシステムや習慣は機能しなくなつて捨て去られる。またそのような時期には、創造性や起業家精神、イノベーション（革新）やインベンション（発明）のタネが突然に花開いて、経済や社会を立て直してよみがえらせる好機もよく起こる」（『グレート・リセット』より）

これをフロリダは「壮大なりセットがいま行われている」と捉えて、グレート・リセットという言葉を使ったわけだ。そしてこのリセットの先には、古い時代の常識や倫理はたぶん通用しなくなる。

そういう時代の変わり目には、いま持っている常識や倫理をいったん見直して、もつと大きな歴史の枠組みのなかで捉え直す必要がある。

たとえば電子書籍が出てきたとき、あるいは音楽のデジタル配信が現れた時、古い人たちはこう言った。

「液晶で本を読むなんてとんでもない。紙の文化を守れ！」

「レコードの持っている豊かな音が、圧縮されたデジタル音源では失われてしまう」

一面だけを見れば、そういう意見は正しい。でももう少し大きく捉え直してみれば、それはまったく違う様相を見せる。

たとえば古代ギリシャの哲学者ソクラテスは、「本なんて死んだ知だ。本当の知は議論にある」と言った。身ぶり手ぶり、発話者の熱狂といった感情が込められた音声にこそ本質があるのであって、それを淡々と冷静な文章として文字に落とした瞬間に、言外のご本質は失われる。文字だつてもとは人間の表現からさまざまなものをそぎ落としたデジタルな表現だったのだ。さらには中世末期のヨーロッパで、書籍が写本から印刷配付へと配信形態が移り変わったときだつて、「写本の持つ豊かな表現が失われ、あんなペラペラで破れやすい紙にするなんて」と怒った人はいっぱいいた。

音楽もそうだ。一九世紀の終わりごろまで音楽とはライブコンサートそのものだった。それを蓄音機の音源に落とした瞬間に、楽器の引き起こす空気の振動も含めてさまざまなものがすでに失われてしまっている。

そうやってコンテックスはアナログからデジタルへと移行してきている。しかしそれはITによって始まったのではなく、中世から近代、そして現代へとつながる連続的な時間の流れの中で引き起こされてきた変化なのだ。そうしたデジタル化によってももちろんさ

まざまなものが失われてきたけれども、一方でわれわれの文明と文化に強い影響を与え、新たな進化を引き出した。

そう、及川さんが第一章でまさに書いてるように、「情報が劣化・欠落するかわりに、大量に生産し、広く共有することが可能になった」のだ。

いまやすべてのものは分解され、再構築される。垂直統合された世界は終わり、さまざまにプラットフォーム上でコンテンツやデータや人間関係は水平に結びつき直し、再構築され、新たな関係を生み出していく。そういう世界が幕を開けようとしている。

そういう新しい社会の常識や倫理が皮膚感覚となったときに、われわれはどう変わるのか。新世界を体現した及川さんという人物が書いたこの本には、その皮膚感覚が縦横無尽に描かれている。

軽井沢で 4月15日

目 次

目次

刊行によせて——佐々木俊尚 3

プロローグ

..... 15

本名でブログ開始 16

日記のタイトル 20

10年前の自分との対話（DEC退職時） 21

自分の想い——転職した理由（マイクロソフト退職時） 25

第一章 変わりゆくIT、進化するウェブ..... 31

デジタル社会に生きるということ 32

第二章

進化の先にあるチャレンジ

..... 71

一般企業もまねしたいギークの七つの仕掛け 44

ソーシャルメディアにおける対称性と言論空間としての特性 51

ソーシャルネットワークにおける二つのコンテンツ 56

ネットを意識したネーミング 65

レコメンデーション機能は少し狂っているくらいが面白い 69

ソーシャルDRM 72

X M D F におけるDRM 78

ソーシャルゲームの社会的意義 83

ダメダメなネットカフェ 91

テレビについて考える 94

電子書籍の先は 99

本の価値 105

ネット時代のメディア戦略 113

第三章

東日本大震災、そしてHack For Japan…… 141

仙台で暗闇に包まれて 142

Hack For Japanのこと 158

Hack For Japanの軌跡——Japan Innovation Leaders Summit 2011 8.6 sat. 160

講演の舞台裏 179

ハッカー文化が日本を救う 195

枠を超えていく 204

第四章

今を生きるエンジニアとして…………… 223

競争——利用者視点で見ることの重要性 224

スキームを変える——メディア、ジャーナリズム、文化 227

標準と独自拡張 237

キャリアのレイヤー超え 244

今日のユーザーと明日のユーザー 248

ITエコシステムという欺瞞 体を使った情報授業	257
不連続への挑戦	262
	253

おわりに——人生は変化であり、挑戦だ 266

* * * * *

エピソード 電子版のみの収録となります。

- その1 名前の由来
- その2 私的SMB(ソーシャルブックマーク)の歩き方

本書の内容は、二つのブログ「Nothing ventured, nothing gained.」(<http://d.hatena.ne.jp/takoratta/>)と「玲瓏」(<http://takyaoikawa.blogspot.jp/>)のエントリーを加筆・修正したものを、および書きおろし原稿から構成されています(そのほかの原稿は個別に明記)。ブログエントリーに関しては、各記事の冒頭に公開日時を表示してあります。ブログを元にした記事内で「書籍版追記」からはじまる「——」までの文章は、書籍化にあたって新たに書き加えたものです。

プロローグ

本名でブログ開始

2006年7月8日 (<http://d.hatena.ne.jp/fakoratai/20060408/1144582274>)

非常に勇気があるのだが、本名でブログを開始することにした。実は、このはてなブログ(注1)のほかにも六つほどブログを持っているのだが、すべてそれぞれ、あるテーマに沿ったものであり、本名は明かしていない。

本名でのブログを開始した理由は、検索エンジンで自分の名前を検索したときに出てくる情報に、不満を感じたためだ。同姓同名の人が少なくとも3名はリストされるのは仕方ないとしても、検索結果の順位が自分の意図とは関係なく変わるのに、ひどく違和感をおぼえる。検索エンジンの仕組みを考えると、納得できるし、この結果がもっとも民主的であるのだろうとは思う。本人以外の人にとっても便利なかもしれない。しかし、どうせ検索されて、封印したい過去の活動があらわにされてしまうのならば、自らがきちんと最新の情報を開示するほうがいい。これが今回、本名でのブログを開始することにいたった理由だ。

これを機会に六つもあるブログを整理することにした。一つはブログというよりも、そ

れ以前に流行っていた日記サイトと呼ばれるものである。トラックバックなどブログ特有の機能もないため、更新はかなり前にやめている。なので、その日記サイトは、今まで書いた分をアーカイブして、閉じるつもりだ。もう一つは楽天で行っている。こちらはある特定のテーマで書いているので、そのままにしておくつもりだ。

あとの三つはシーサーブログに置いている。一つは読んだ本の読書感想文を書いているものである。こちらはSEOを自分なりに行ったり、いろいろブログ特有の実験もやっている。このまま続けていこうと思う。もう一つも自分の英語学習用のメモなので、そのままにしておくつもりだ。シーサーに置かれている残りの一つは、IT関係のニュースにコメントをつけているものだ。これは、今後、ここで書くものと重複することになると思うので、削除することにしよう。

最後の一つはBloggerに置いている。こちらにはLinuxシステムの設定についてのメモだ。開設当時、グーグルのツールバーに自分のBloggerのサイトにポストできる機能がついていた（今はない？）ため、開設したものだ。ポストしたLinuxのメモは、今でもたまたま参照することもあるし、ときには更新もしている。これも残しておこう。

ということ、整理するとはいっても、結局二つ閉じることを決めただけで、あとはそのままということになった。なんとも整理整頓の下手な男だと、自分でも思う。捨てるに捨てられないガジェットや本などが部屋を占領しているのと、どこか似ている。

ところで今回、ブログを開設するのに、自社のブログサイトを使わなかったのだが、特に理由はない。MSNのほかのツール（MSNメッセンジャー、MSNデスクトップサーチャーなど）は愛用しているので、会社に反旗をひるがえしたわけではもちろんない（注2）。

なお、会社のブログも2日に一度は書くようにしているので、そちらとの使い分けも考えなければいけない。とりあえず、仕事にはまったく関係ないことはこちら（注1）で書くことになるだろう。どちらに書くこうか悩んだときも、こちらに書くことになるのだろうとも思う。

書籍版追記——現在は、さらに状況が変化した。「Nothing ventured, nothing gained (<http://d.hatena.ne.jp/takoratta/>)」というはてなダイアリーのブログと「Bloggerで書いている」玲瓏 (<http://takuruaoikawa.blogspot.jp/>)」という二つのブログのみ使っている。どちらも実名で書いている。

また、ソーシャルメディアが広まるにつれて、以前よりブログに書く機会は減っている。以前はブログのみが、個人が世の中にまとまった意見を発信できるものであったが、今ではソーシャルメディアがある。フェイスブックやグーグルプラスでも自分の意見を書き、知人や友人、さらにはまったく面識がないような人たちとも意見をかわす。フェイスブックやグーグルプラスで当初書いた内容を、その後ブログで公開することも多い。新しい形

の執筆スタイルではないかと思う。

ツイッターは140文字という制約と、「ソーシャルネットワークにおける二つのコンテキスト」(本書56ページ)で書いたように、多くの人を巻き込んだの議論がしづらこともあり、ブログとの連携に限って言えば、おもに書いた記事のアナウンス用に使っている。ブログで新しい投稿をすると、しばらくしてからツイッターにも流されるように設定してある。――

注

(1) 「Nothing ventured, nothing gained」(<http://d.hatena.ne.jp/takoratta/>)。

(2) このブログ記事執筆当時、筆者はマイクロソフトの社員だった。

日記のタイトル

2006年4月10日 (<http://d.hatena.ne.jp/takoratta/20060410/1144678587>)

“Nothing ventured, nothing gained.” 私の日記のタイトルだ。英語のことわざだが、日本語だと、「虎穴に入らずんば虎子を得ず」だともいわれるが、なんだか違和感がある。英語がそれほど得意なわけではないが、“ventured”という単語の響きが、「虎穴に……」ではうまく表現できていない気がする。実は、私の好きなフレーズはこれだけでは終わらない。全文を書いておこう。

Nothing ventured, nothing gained.

We could all change the world.

ご存じの方も多いと思うが、英ヴァージン・グループ総裁のリチャード・ブランソンの座右の銘だ。私のもっとも尊敬する経営者。どんなに大きな資本がすでに支配している市場であっても、決してひるまず挑戦し続ける。彼ほど大きい仕事はできないかもしれないが、常に挑戦する心を忘れずになりたいと思う。

10年前の自分との対話(DEC退職時)

2006年9月8日 (<http://d.hatena.ne.jp/takorattai/20060608/1149722434>)

infotalkというメールングリストで、よしおさんが書かれていることを読んで驚いた。専門フィールドは微妙に違っているものの、10年ほど前(正確には1997年)に私が考えていたことと、多くの類似点があったからだ。

10年前、私はよしおさんと同じDECという会社で、おもにAlpha(注)版Windows ZI関連のエンジニアをしていた。私の記憶が確かならば、よしおさんはすでに退職されていたと思う。業績が極度に悪化していた当時のDECは、早期退職プログラムが定例行事になり、先輩や同僚の退職も相ついでいた。猫の目のように製品戦略も変更され、その影響により、残ったエンジニアのモチベーションも低下していた。

何度も転職を考えたのだが、そのたびにDECの復活の可能性を信じたいという気持ちもあり、なかなか踏み切れないでいたが、ある出来事がきっかけで、背中を押されるような形となり、1997年、最終的に転職することに決めた。

最終出社日の少し前に、社内に退職の挨拶をするメールを送ったのだが、そこに当時の私のホームページに書いた退職のメッセージをリンクした。プライベートな部分も多いの

で、全文は引用できないが、内容は次のようなものだ。

〈略〉

会社も変われば人も変わる。私の夢は他の会社で実現しようと思います。古いフォークソングではありませんが、新しい船を動かすのは古い水夫ではないのでしょうか。これから一ファンとして、外からDECを見守りたいと思います。

ある雑誌のインタビュで書かれていたことが忘れられません。そこにはマイクロコンピュータが登場した当時に夢描いた世界は遠くなり、今では悪しき商業主義が蔓延^{はびこ}ってしまったことが嘆かれていました(注3)。確かに、10年前とは比べ物にならないほどの営利主義が、このコンピュータ業界を襲っているのかもしれない。アラン・ケイの考えたパーソナルコンピュータの構想(Dyanbook)が現在のパーソナルコンピュータにより実現されたとは必ずしも言えません。また、バーネーパーツに始まるハイパーテキストの概念が今のインターネット上のWWWで、すべて利用可能になったとも言えません。

しかし、それは悲観的にしか考えられないのでしょうか。先人達が考えたさまざまな概念が少し形を変えはしたものの、やつと見ること、触ることができるようになってきたと考えることはできないでしょうか。私にはこれは研究室レベルのものが

実用化される際の、当たり前前のプロセスのように思えます。

我々が幼いころ読んだ空想小説のような、輝かしい未来は2000年にはやってこないかもしれません。しかし、コンピューターそしてソフトウェアを持つ可能性を僕は信じます。パーソナルコンピューター業界もそしてインターネットも、すでに多くの利権が絡むきれいごとだけではすまない世界になっています。マイクロソフトもNetscapeも、いかに自社のシェアを伸ばすかだけに懸命のようも見えます。それでも僕は、コンピューター技術の発展が、人の生活を豊かにすることを信じたいと思います。

日本DECのCSP、DRP（注4）で尊敬できる多くの先輩や同僚が辞めていきました。そのとき以来、友人や先輩の退職を、私は次のように考えるようになりました。「この業界ではどの企業にいて働いていても問題ではない。この業界での転職はコンピューター業界という大きな会社において、部署を異動するようなものである」。異なる会社に勤めていても僕らの夢は同じはずです。方法は異なっても同じ夢に向かっている。そんなふうに見えるのです。こんなことを言うと、僕のことを夢想家とも思われかもしれません。でも僕一人じゃないはず。いつの日にかまた一緒になり、夢を語り合えることができたらいいなと思います。

今読むと、少し恥ずかしくなるような内容だ。「私」と「僕」が混在しているが、これも当時、自分なりに考えて、わざと行ったものだ。

今も、この考えにあまり変わりはない。だが、10年（正確には9年）で、どこまで実現できただろう。改めて、自分がしてきたこと、これからやるべきこと、を考えさせられた。

注

(1)もう知らない人もいるかもしれない。DECによるRISCプロセッサだ。

(2)当時の脚注↓とこのように書きましたが、これは実際の坂村氏のインタビュの一部を抜粋したものです。これだけを読むと坂村氏はTRONに失敗し絶望しているかのように読めてしまいますが、そんなことはありません。Wiredの記事でも実際にTRONが身近なさまざまなシステムに利用されていることが示されています。

(3)この部分、元のブログ記事ではある雑誌記事を引用していたのだが、引用元の記事を発見出来なかったため、書籍ではその内容を要約する形に変更した。

(4)DECが当時行った早期退職プログラムの名称。

自分の想い——転職した理由（マイクロソフト退職時）

2006年12月31日 (<http://d.hatena.ne.jp/takorattai/20061231/1167497679>)

10月28日にブログのプロフィール欄を更新することで、マイクロソフトを退職したことをひっそりと伝えさせていただいた。退職と間を空けず、すぐに次の新天地で仕事を開始したため、あわただしかったというのが、きちんとブログのエントリーとして書かなかつた一番の理由ではあったが、Windows Vistaの開発完了を間近に控え、多忙を極めていたマイクロソフトの元同僚たちに余計な迷惑をかけたくないというのも大きな理由であった。

退職からすでに2ヶ月が経った。その間に何名かの方とは直接お会いする機会があり、お話させていただいた。お会いした方々からは「驚いた」と言われ、そして「なぜ」と聞かれた。私が愛情を込めて、Windows製品の開発を担当していたことをご存じの方はわかりだったので、まさか退職するとは思っていらっしやらなかったようだ。

Windows Vistaも無事出荷された。自分も少し落ち着いたので、年末でもあるし、ここでいままさらではあるが、きちんと転職の理由を書いておこうと思う。

マイクロソフトの将来とは関係ない

まず、「マイクロソフトの将来に悲観されたのですか」という質問を多くいただいた。マイクロソフトのビジネス状況については、私はそれなりに知ることができたが、マイクロソフトとの守秘義務があるので、それをここで詳しく書くわけにはいかない。ただし、これだけは言っておく。マイクロソフトの勢いがなくなってきた、もしくはなくなる可能性がある、というのが私の退職の理由では決してない。マイクロソフトは大躍進するかもしれないし、凋落するかもしれない。それは私のコメントでできるものでないし、私の退職とは無縁だ(注1)。むしろ、マイクロソフトの安定性や私の社内でのポジションなどを知る方からは「もったいない」「絶対後悔しますよ」と言われた。確かに、実際にソロバンをはじめ、残りの人生の安定性と想定される生涯賃金を計算したならば、退職するなどは普通ならば考えなかつただろう。

新たなチャレンジの道を選ぶ

ならば、なぜやめたか。会った方には、いろいろな言葉で説明したが、ここではあえてきわめて乱暴に言おう。

飽きたのだ。

私はすでに9年をマイクロソフトでWindowsの開発一筋で過ごしてきた。その前の会社（注）でもWindows NTを担当していたので、それをあわせると10数年以上をWindowsとともに過ごしてきた。傲慢と思われるかもしれないが、Windowsの開発であれば、それなりにこなせる自信はある。

Windows Vistaの次にはLonghorn Serverがあり、そのあとにはまたService Packや次のリリースがあるだろう。開発のつど、新たなチャレンジはあり、どのような状況になっても、きつとそれなりに無難にはこなせる。マイクロソフトに勤め続けるという安定した路線に乗った場合、数年後の自分が想像できてしまうのだ。

実は、今年はじめ、私は自分のキャリアをじっくりと考える機会に恵まれた。自分のキャリアの棚卸しを行い、将来の目標を考えた。そこで気づいてしまったのだ。今が変革のときだ。

もし何も変えなかった場合、自分は今後もWindowsとともに歩んでいくしかない。それは9年前の自分が希望した道ではあった。ただ、状況は変わった。業界の勢力図も、革新的な技術の分野も、9年前のそれとは異なる。OSの技術に携わるといのが魅力のない仕事になったとは思わないが、インフラとして安定性や信頼性が要求されるようにな

るなか、期待される仕事の中身も9年前とは異なってきた。

はたして、この状況で今の仕事を続けるのが自分の希望することなのか。自分もすでに不惑の年を越えた。違うことにチャレンジできる機会はそう多くない。

そう、チャレンジをしてみたくなったのだ。

違うことにチャレンジをするならば、マイクロソフト社内で異動という手段もあった。実際に社内ポジションも検討してみた。ありがたい申し出もいくつかあった。しかし、どうせ違うことをやるならば、まったくしがらみのない、新しい環境で行いたい。リスクも大きいだろうが、得るものも大きいだろう。そう考えたのだ。

そう、チャレンジするからには、大きなチャレンジをしてみないと意味がない。私はあえて、自分に厳しい道を選んでみた。社内ではなく、社外。今までの専門とは異なる分野。何名かの方に言われたように、もしかしたら、このチャレンジは失敗して、後悔することになるのかもしれない。だが、それでも、チャレンジもせず、生きる屍しかばねのようになって仕事を続けるよりは、よい選択であったと思う。